九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

残夏の表象：南部共同体の異邦人 : Light in August を読む

山田, 久美
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/6790319

出版情報：九大英文学. 43, pp.63-73, 2000. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

残夏の表象： 南部共同体の異邦人
― *Light in August* を読む

山 田 久 美

序

『八月の光』は、一見無関係なリーナ・グローヴとジョー・クリスマスという二人の主人公を基軸として、彼と彼女そして彼らをめぐる人々の、過去と現在が織りなす複雑な人間模様を透過しつつ進捗してゆく物語と受け取られてきた。実際のところ、リーナとクリスマスという、いわばこのストーリーの中心人物ふたりはいちども顔をあわせることがない。クリスマスが凄絶な死を遂げるまでの短い期間に(実際には10日間ほどであったが)、それぞれの旅路の果てに辿り着いたジェファソンという特殊な「土地」に於いて、彼らは僅かに共時的接点を持つに過ぎない。それゆえ、彼らをめぐる人々の間にも緊密な相互関連性があるようには、表面的には見えないのである。

かつて大橋健三郎はこの作品について次のように述べている。「たとえばフォークナーの作品のなかで、もっとも正統的な、小説らしい小説と考えられる『八月の光』にしても、多くの読者はそれを普通の小説として読むことにかなりの困難を感じる。(中略) ここには数人の人物が登場するが、一体それらの人物たちによる幾つかのプロットは、本質的にどのように関連しあい、どのような作品の「統一」を作りあげているのだろうか。リーナとバイロン・バンチ、ジョー・クリスマスとジョアナ・バーデン、またこれらの人物たちとゲール・ハイタワーの物語には、いったいどんな統一的テーマがあるのか。一般には、その統一的テーマが見当たらないために、この作品はしばしば小説としてよりは、社会学的見地から、あるいは象徴と神話の観点から批評解釈されがちだ。・・・」[1] ここでの彼の評価の妥当性は、作品におけ

る unity の不在感を鋭く指摘したことにあるだろう。

確かに、バイロン・バンチはしばしばジョー・クリスマスの名を口にはするものの、クリスマスが製板所を辞めた後はついに彼に遭うことはない。ジョアナ・バーデンはリーナが町に到着した日には既に死体となっているのだし、リーナとクリスマスの双方に関係のあったルーカス・バーチ（ジョー・ブラウン）は、彼らを繋ぐ役割を果たすどころか、金さえ入手できればひたすらに彼らとの関係から身を遠ざけようとする始末である。こうした脱関係性はまさに、「統一的テーマが見当たらない」と論難されても無理のないところである。またそれゆえにこそ、モダニズムの先駆的小説として現在も光彩を放つ作品であるのだろう。

しかしながら、このように一見紐帯性に乏しい人々に関わるそれぞれの物語が幕を閉じたとき、全体に一種 synchronic な余韻が漂うことは否めない。もし、これらの作中人物群に共通する属性とでも言うべきものがあるとしたら、それは一体何であろうか？なかでも、特に物語の解読に重要な役割を果たす人物があるとすればそれは誰であろうか？この作品を読み進めていくうえでふと心に浮かんだ上のような問いを契機として、以下フォークナー独特の “unity（纏まり）” のありかを探るひとつの論考を試みたい。

I　「他者」の行く末

ここでいう「他者」とは、いわゆる「よそもの」のことである。この物語に登場する主な人々がいったいどこからやってきたのか、まずはじめに具体的に検証してみよう。アラバマから歩いてやってきた（“All the way from Alabama a-walking.”）リーナ・グローヴ。[2] アーカンソー出身であることが後に判明することになる、ジョー・クリスマス。ニューイングランドにルーツを持つジョアナ・バーデン。バイロン・バンチの出自は不明ながら、彼が製板所に勤めだしたのは「初めてジェファソンにやってきた7年前」であると明記されている。ルーカス・バーチは流れ者であり、牧師ハイタワーは神学校を出たら任地としてジェファソンへ「帰りたい」というのではなく「行きたいと熱望」していたというのだから、その地の出身ではないことは

確かであろう。ハインズ夫妻も同様に、「ジェファソンから20マイル向こう」のモッタウンからはるばる汽車でやってきて騒動を起こす。このように、彼ら一人一人が生粋のジェファソニアンから見れば、あくまでも他所者に過ぎない人々であるのは、たいへん興味深い。

最終的には、このように他所から集まった登場人物の全てが、死ぬか、旅立つか、元の場所に戻るかして、ジェファソンから去ることになる、という事実も一応ここで記憶にとどめておく必要があろう。ただし、例外はある。ハイタワーの最後の描写は彼の家の窓辺で座っている姿であって、実際に町を離れるわけではなく、単に疲労から深い眠りに落ちていくという解釈も一応可能ではある。しかし、理由は後述するが筆者はこれを彼の臨終の瞬間と捉えるべきだと考える。こうした「他所者集団」の流転を描くことで、何が浮き彫りにされるのであろうか。何故作者フォークナーは、わざわざこのような背景・環境を措定する必要があったのであろうか。その答えを探る最初の段階として、或る重要なポイントを指摘しておきたい。

II　「孤」の三角構図

前章で見たグループの中でも、特に異彩を放つ人物とは誰であろうか。主な登場人物たちがこのジェファソンという町に集ったのは、おそらく一人を除いては、偶然という要素が極めて濃厚である。リーナ、ルーカス、ジョー、バイロンの誰を見ても、ここを是非とも終着の地とすべき理由はなかった。例えばリーナの場合は、この場所はたまたまルーカスに関する噂に導かれてやってきた通過地点であるに過ぎないから、彼が逃亡したと分かるやすぐにまた新たな旅立ちの時を迎えるのである。

しかし唯一、自ら望んでこの町にやって来て長年住みついていた人物がいる。誰あろうゲイル・ハイタワーその人である。フォークナーが彼ハイタワーに担わせた負荷が、他の者と決して等価ではないと思われる一つの要因がここにある。

では具体的に、ハイタワーにどのように重要な役割が与えられているのかをみてみよう。特記すべきは、この「元牧師」である人物が、リーナの出産

とジョー・クリスマスの死という、二つの人生のクライマックスの立ち会い人となっている点である。いやむしろ立ち会い人どころか、リーナの場合は産婆兼医者という大役を果たすのであるし、クリスマスの場合は偽の証言をしてまで彼を救おうと試みたのである。このことは、既に述べたように、ルーカス・バーチが同様に二人と関わるというストーリー上の重要性を帯びながらも、一人を捨て、一人を密告するというどちらにとっても負の関わりしか持たなかった点とは極めて対照的であると言わねばならない。

しかし、それならばハイタワーには何らかの傑出した属性が付加されているかというと決してそうではない。例えばアルフレッド・ケイジンは、彼ハイタワーを明らかに作品中「失敗」したキャラクターだと断じた。何故ならば「生気が尽きてしまい、じっと考え込む以外なに一つ彼には機能が果たせない "For just as his life is over, and he has no function but to brood, "」からで、ハイタワーは「他の作中人物（ジョアナ、クリスマス、グリム、ハインズ等）と同じスケールは持っていない。"he is never on the same scale with the other characters, who are equally obsessed by the past, but who function on the plane of some positive action. "」という。[3]

確かにハイタワーはジェファソンにおいて社会的には葬り去られた人間だ。妻を失い、リンチされ、自分の教会から追放されるという憂き目にあった後、ようやく、かろうじて「この社会の片隅に存在することを許容」されているにすぎない。彼の後半生は孤独そのものであったことを、色褪せた手書きの看板が物語る。つまり、自ら望もうが望むまいが、他所者は異端としてしかこの町で生きていくことはできないことの生きた証となっていた男であった。徹底的なアンチ・ヒーロー。社会のアウトサイダー。それがハイタワーに科された重いペルソナである。

ここで我々は、実はハイタワーと相似的な境遇にあったもう一人の人物を想起せざるを得ないだろう。ジョアナ・バーデンである。彼女の場合は、例外的にジェファソンで生まれ育ったものの、自らの（北部出身の）他国者としての血筋を強く認識しており、生得的ともいえる異邦人感を終生抱いたまま、ハイタワー同様、世間から離れて独りで暮らしてきた。その期間は、長さという点から見れば実に牧師が村八分となって以来の年月にほぼ等しいと

考えられるのである。彼女もまた、家族をこの地に葬った過去を持ち、ハイタワーと同じく父祖の呪縛にあってこの地から離れられぬ宿縁を背負っている点で、他の流浪性の作中人物たちと同格ではないのである。こうしたジョアナとハイタワーの近似性は物語の繋がりを読みとく上で見逃せない糸口となる。

近隣の住民との交流から隔絶した生活。ハイタワーの家も、そこから程遠くない場所にあるジョアナの屋敷も、共に暗い色調で描かれる。[4] はじめジョアナの屋敷に、夜中に侵入したクリスマスは彼女と共に性の暗い深淵へと迷いこんだ。それからジョアナの殺害後、迷走するクリスマスは、最後にハイタワーの家に飛び込んで、そこでグリムに射殺されてしまうのである。フォークナーが、当初この小説を "*Dark House*" と銘打とうとしたのも、この暗い家のモチーフが鮮明に意識の中にあってそこから南部社会に特有のテーマを紡ぎだそうと企図したからであろう。[5]

ここで、おぼろげにではあるが、或る奇妙な三点構造が浮上してくるように思われるのである。それは即ち、ジョアナ、クリスマス、ハイタワーによって形成される孤の系譜である。その土地の人間として受け入れられていない点はもとより、更に彼らに通底しているのは、配偶者がないこと、子がないこと、身寄りがないこと、友人がないこと、裕福とはいえないこと等々で、このような囲繞により彼らは家父長制社会の内部に留まることを許されぬ老若男女の「孤」を、究極の形でそれぞれが体現しているのである。[6]

III　クリスマスとジョアナ：母性忌避の心的メカニクス

無い無い尽くしの三者はしかし、彼らのみの共通項を持つ。それは一言で言えば、彼らに覆い被さり、彼らを圧倒し、彼らの人生を支配してきた過去の重みである。クリスマスは生誕にまつわるその部分があまりにも不鮮明であるがゆえに苦しみ、ジョアナもハイタワーも死んだ先祖の言説や行為に封じ込められ身動きがとれない。ここでいよいよクリスマスとこの二人、それぞれの間に起こった摩擦の正体を考察すべき時が来たようである。

まず、ジョアナとクリスマスの関係に限って考えてみたい。彼らはジェ

ファソン社会における異端（outsider）同士である。ジョアナについての従来の批評は総じて厳しいものがあった。曰く、頑迷な奴隷廃止論者の末裔、独り身で変人、色情狂、信仰を強要する女、エゴイスト、等々で、概して彼女はリーナの明るさと対照的な位置に置かれていた。[7] しかしクリスマスが二年ものあいだ彼女との愛欲に溺れ、あげくに彼女を殺害し、畢竟彼女ゆえに自らの命を危険に晒したという事実を軽視するわけにはいかない。なぜ、クリスマスは滅びの予感を抱きつつも彼女との関係を簡単に断つことが出来なかったのか？ジョアナの果たす役割は、実はクリスマスにとっては極めて重要なものであったからである。それは、誤解を恐れず一言で言うなら、彼女の持つ受容性にある。

ジョアナはクリスマスにとって第一に肉欲の対象（女）であった。彼は彼女を征服することによって成人男性としての identity を手にいれようともがく。しかしジョアナは外見上も内面も「男性的な強靭さ」を秘めていたために、彼らの関係は屈折し、クリスマスは勝ち目のない持久戦に挑むような心境に陥る。[8] この葛藤のなかで、彼の小屋を訪れることにより先に「折れた」のはジョアナのほうであった。

我々はここでジョアナが男性的な表層の下では彼を受けいれる母性的存在であったことを再確認したい。肉体的に受容する関係となった後、彼女は彼に無視されるとわかっていても食事を用意し続けた。彼を誘い、迎え入れる姿勢を最後の日まで保っていたのだ。また、彼の出自を問わず、黒人であると告白されても拒絶反応を示さなかった。（勿論この場合の「受容」には彼女の、過去に対する複雑な拘泥があるのだが。）これが彼の初めての女ボビーや他の女たちとの大きな違いである。

だがクリスマスを受容する一方で、無限に彼を搦め取り吸収しようとするジョアナの母性原理を、彼は徹底的に拒絶する。毛布をくれない彼女に恨みがましい思いを抱くクリスマスは自分で決してそれを調達しようとはしない。しかし、彼女の部屋に行きさえすれば、暖かい夜具や暖炉があることを彼らは互いに知っているのである。彼女の母性を感じさせる心配り ― 例えばボタンの付け替えや、食事の支度等 ― に対する彼の拒否反応はほとんど幼児的で意固地とも言えるほどである。（ここでわれわれは養母マッキーチャン

夫人に対する彼の仕打ちを思いださずにはいられない。）しかし、こうした彼女（ら）の物心両面の提供を、内縁の夫（あるいは息子）的存在であった彼の当然の権利として受け入れた場合、それが却って「自分が生きたい人生」を自由に生きるための枷となりうる陥穽であることをクリスマスは本能的に悟っていたのだ。自己のアイデンティティのみを追及する峻烈な人生を送ってきた彼には、ジョアナの提示した黒人学校行き、（彼女の代替弁護士という）いわばヒモ的代理の生など、問題外の選択であったのだ。クリスマスのジョアナ忌避の根本動機は、簡略化しすぎたきらいはあるが以上のように解明できる。

Ⅳ　クリスマスとハイタワーの「死」

それではここで、彼が何故、人生の最終局面ともいえる逃避の瞬間にハイタワー宅へと向かい、牧師を殴り倒したのかという疑問について改めて考察したい。

無論、全ては偶然の一言でかたがつく場面である。たまたま、祖母ハインズ夫人からハイタワーの家、即ち安全な場所の存在を脳裏にインプットされていた。たまたま、グリムに追われて行き着いた先がジョアナ邸の近くであった。たまたま、行く手を遮った相手を殴ったらそれがハイタワーであったに過ぎない。等々。

しかし、フォークナーほどの作家がこの小説のクライマックスにおいて、アンチ・ヒロイックなハイタワーを敢て登壇させた理由について、上記のような偶然性のみに力点を置いて説明がつくと考えるほうが却って不自然ではないだろうか。むしろ、彼ハイタワーの存在意義はクリスマスと対峙したこの瞬間においてこそ、最大限にその真価を発揮していると考えられる。

ここで我々は、クリスマスという人間が最も忌み嫌った行為について思い出してみる必要があるだろう。彼は、生涯祈るということをしなかった。マッキーチャンとの確執が決定的なものとなったきっかけはこの養父に教義問答の暗記、即ち祈るという行為を強要されたことに拠るのだし、ジョアナ殺害を決意したのも彼女が彼について祈ることを始めたからであった。この男の

名の由来については今更思い返すことでもないが、クリスマスの日に「捨てられた」彼が時折思い出す、「神はわれをも愛したもう。」という聖句への偏執は、自分が神に愛されていないという劣等意識の裏返しである。神が即ち人の親たる存在であるとすれば、親に捨てられた自分は神（もしくは天なる父）からも見離されていると感じ、それゆえに形式的にさえ祈るという行為に自己を投じることは出来なかったのである。

そこで、ハイタワーであるが、かれは元牧師で職を辞した後もやはりその習性から抜け切っていない。おそらくハインズ夫人から牧師の前歴について聞かされていた経緯もあり、逃げるクリスマスにとって、ハイタワーとは宗教的な権威を多かれ少なかれその身に帯びた存在であったろう。（逃走中にベデンバリ牧師に暴行を働いたことを思い出したい。）したがって、クリスマスがハイタワーに直面して咄嗟に「恐ろしい復讐神に似た姿で」彼を打倒したのは、クリスマスの内なる神への不信の劇的な表出だったのであり、ひいては、父性的存在自体を拒絶しようとする心の現れであったとみることができよう。

しかし、フォークナーが我々読者を驚愕させるのはその後の場面である。殴られて重傷を負ったハイタワーであるが、彼は追跡隊に向かってクリスマスの無罪を叫ぶ。（以前バイロンとハインズ夫人に偽証を依頼された折りには、「わしはせん、わしはせんぞ！」と断言したにも拘わらず。）ここで我々はケイジンの、「じっと考え込む以外なに一つ機能が果たせない」というハイタワー評が実は誤りであると理解できるのである。[9] ハイタワーの、彼を護ろうとする声がクリスマスの耳に届いたかどうか。フォークナーはこの点には全く触れない。しかし、もしもこれをクリスマスが聴いていたとしたら、自らが殴り倒した、何ら世俗的繋がりのない人間から、彼は初めて無償の温情を受けたことになる。

銃を手にしていながら、何故クリスマスはハイタワーを撃たず、グリムに撃たれるがままになったのか。瀕死の彼の「平和な、はかり知れない、耐えがたい目つき」は何を語っていたのか。それはひとつの可能性として、彼が、死をも受容しようとした（心中を図った）女ジョアナと関わったこと、この場面において自分を傷つけた彼を咄嗟に救おうとする堕牧師ハイタワー

と関わったことと無関係ではないのかもしれない。内なる母殺し、内なる父殺しを連続して成し遂げたクリスマスは、「父」の情を土壇場で知って現身を放擲し、弾丸を受けたのかもしれない。言うまでもなく、この場合の「父」とは血縁でも象徴でもない仮象に過ぎないのだが。

さてジェファソンという一つの南部共同体外にある者として、共同体側の人間グリムから見ればクリスマスもハイタワーも、共に退けるべき異物である。クリスマスはグリムに殺されるばかりか屈辱的去勢までされてしまうのだし、ハイタワーもグリムを止めるどころか逆に罵倒され、ついにクリスマスを助けることは出来なかった。ここに救いの絶えた世界のさまを見て取ることは容易なのだが、果たしてそうであろうか。ハイタワーとクリスマスは、互いに何の拘わりもないうえ、単にグリムに虐げられ排斥さるべき対象にすぎなかったのか。

ここで殺戮の場面からもう一度思い返してみたい。クリスマスに殴られた牧師は頭から血を流していた。瀕死のクリスマスが去勢されたとき、その傷口から迸ったどす黒い血。事件後、牧師は独り窓際に座り、さまざまな回想の中でクリスマスのことを思いだそうとする。その瞬間に、自分の「内臓で最後まで堰き止められていた水が裂け破れて噴出するかのように感じ」それを客観的に見守ろうとするうちに次第に意識を失っていく。牧師は「自分は死ぬのだ。祈らねばならん、何とか祈ろうと勤めねばならん。」と思うのだが、最後まで祈りをあげることはしないまま闇のなかに消えていくのである。つまり、ここで牧師は（実際には内臓疾患による内出血を起こしたように思われるが)、クリスマスの死に感応し、それを追体験しているに等しい。祈ろうと勤めながらもそれが叶わずに終わってしまうのも、まさしく彼がクリスマス同様、この南部共同体社会にあって、神に見捨てられた人間であったことの証左であろう。しかしここに於いて我々には、クリスマスとハイタワーとが不思議な絆で繋がっていることが理解されるのである。

結　び

さて、フォークナーは以前、クリスマスはキリストを擬した存在なのでは

ないかと質問された際、いやそうではないと答えている。彼はむしろリーナの持つ強さ明るさに惹かれ、彼女に関する話を書きたかったのだと答えている。[10] しかしこのように見てくると、(リーナ自身、個として重要なキャラクターであることは否定しないが) やはり読者の胸に迫るのはあくまで卑小な人間として描かれるクリスマスやハイタワーらの内に潜むメシア的な痛みの感覚ではないだろうか。

イエス・キリストは2000年のむかし、名もないユダヤの私生児であり、共同体社会の秩序を崩壊させる異種と見做され、罪人として謗られながら磔刑に処せられた。ここでクリスマスと象徴としてのキリストを結ぶのは安直に過ぎるけれども、読後の我々としては彼ら周縁の人々を主体とした語りであるがゆえに、一層普遍性を帯びた、過去を切り離すことの出来ない人間の宿命に思いを致さずにはいられないのだ。それは生まれながらに共同体の狭溢な枠内に護られ、疑いもなくそこに安座している者には決して与えられぬ種類の桎梏であり、そしてこうした異邦の人々の苦悩と滅びの姿をひらいて見せた作者フォークナーの掌 (たなごころ) は、— ギリシャ的な明るい8月の光を希めていたにせよ — 僅かに残された夏の光に血の色のように映しだされる、どちらかといえばヘブライ的な、人間の業のようなものを掬おうとしていたのではなかったか、そんな気がしてならないのである。

註

1 大橋健三郎『人間と世界：アメリカ文学論集』(東京：南雲堂、1971) p. 126.

2 William Faulkner, *Light in August* (New York：Vintage, 1990) p. 1.
本稿のテクストはこの版を使用する。

3 Alfred Kazin, "The Stillness of *Light in August*." Frederick J. Hoffman & Olga W. Vickery, eds. *William Faulkner*：*THREE DECADES OF CRITICISM* (New York： Harbinger, 1963) p. 257.

4 ジョアナ宅の「暗さ」の象徴性については以下の論考が参考になるだろう。金澤哲 "レトリックの光と闇：『八月の光』をめぐって"『フォークナー』(東京：松柏社、2000) 第二号、pp. 136-142.

5 Noel Polk, *Children of the Dark House*：*Text and Context in Faulkner* (Jackson：

UP of Mississippi, 1996）参照.

6　上野千鶴子は健康な成人男子だけを「人間 man」とみなす近代思想のもとでは子供は「人間以前」、老人は「人間以後」、女性は「人間以外」の存在であり、近代主義的な「人間」の概念は必然的に「ヒトでない」ひとびとを生み出し排除することによって成り立っていたと説く。これは例えばグリムの場合、「健康な南部純血白人男子」を人間と見做す、という読み替えも可能であろう。『家父長制と資本制』（東京：岩波、1995）p. 9. 参照。

7　Patricia E. Sweeney, *William Faulkner's Women Characters*：*An Annotated Bibliography of Criticism*（New York：Random House, 1985）pp. 141-172.

8　ジョアナとクリスマスの関係を「作品の中央部分に置かれた最も壮絶な戦い」と喝破したのは寺沢みづほである。この闘争における力学的分析は明快ながら二人の恋愛要素は殆ど無視されている。『民族強姦と処女膜幻想：日本近代、アメリカ南部、フォークナー』（東京：お茶の水書房、1992）p. 77. 参照。

9　しかもケイジンは彼のリーナの助産に関しては等閑視している。

10　Frederick L. Gwynn & Joseph. L. Blotner eds., *FAULKNER in the University*：*Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958*（New York：Vintage, 1959）p. 117. ここでフォークナーは次のように語っている。"… that story begin with Lena Grove, the idea of the young girl with nothing, pregnant, determined to find her sweetheart. It was—that was out of my admiration for women, for the courage and endurance of women."